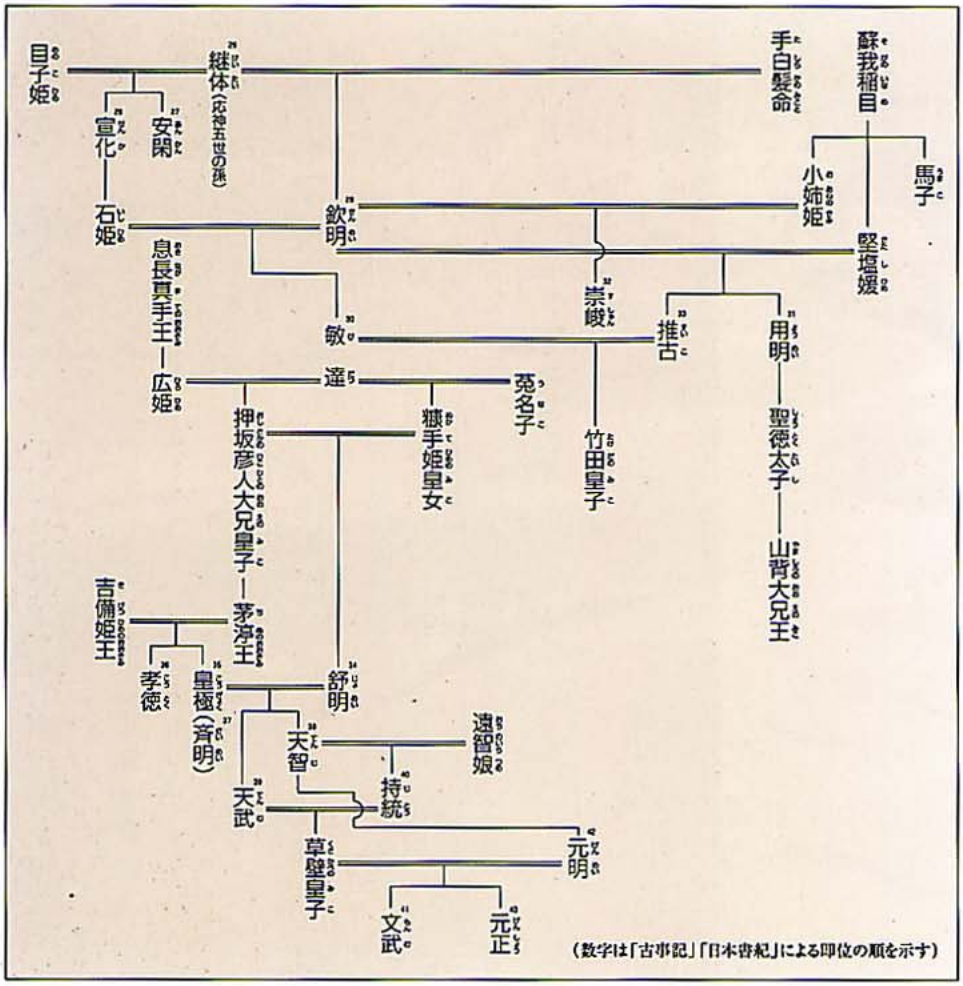
香芝―古代史の謎を探る③

尼寺廃寺北遺跡の謎を探る

塚口義信

皇室系図（6世紀初頭〜8世紀中葉）



平成八（一九九六）年四月十一日（木）、各新聞社は尼寺廃寺北遺跡（香芝市尼寺二丁目に所在）について、それぞれ次のような見出しで、大々的に報道しました。

●「太子創建の葛城尼寺か、一〇〇年に一度の大発見」（『朝日新聞』）

●「聖徳太子建立の葛城尼寺か、最大級心礎の基壇」（『産経新聞』）

●「金の耳飾りなど続々「7世紀前半」聖徳太子が建立？」（『奈良新聞』）

●「幻の「葛城尼寺」か　最大の塔礎石出土」（『日本経済新聞』）

●「法隆寺上回る塔跡発掘「高さ40メートル級飛鳥時代最大」聖徳太子建立か」（『毎日新聞』）

●「法隆寺しのぐ五重塔跡「3.8メートル四方の心礎」聖徳太子ゆかりの寺か」（『讀賣新聞』）

そして、四月十四日（日）の現地説明会には、なんと、三、二〇〇人もの人たちが集まり、現場を取り巻くように長蛇の列が続いたといいます。

では、飛鳥時代最大級の塔の心礎をもつ尼寺廃寺北遺跡とは、どのような寺院であったのでしょうか。今回は、この寺院の謎に挑んでみたいと思います。

◆みんなで仮説を立ててみよう

先に掲げましたように、当時の新聞報道では、特に考古学関係の研究者より、この寺院は聖徳太子（五七四―六二二年）建立の「葛城（木）尼寺」ではないかとの説が提唱され、それが、かなりセンセーショナルに取り上げられました。しかしながら、文献史学（歴史学）の立場から考えると、この説にはいくつかの難点があり、新聞発表に先立って二上山博物館で行われた遺跡検討会（四月六日〈土〉）のときから、私はむしろ、敏達天皇系の、天智・天武両天皇の祖父にあたる"茅渟王"の一族による建立ではないか、という説を提唱してまいりました。

そこで以下、この寺院の創建年代、創建者、名称などについて考え得たことをしるし、ご叱正を頂戴したいと思います。

ただし、以下の叙述はあくまでも私見ですから、そのつもりでお読みいただきたい。というより、私はむしろ皆様方に、この小論を踏み台にして、皆様方ご自身の仮説を立てていただくことを希望しています。

◆発掘調査でわかったこと

今回、取り上げました尼寺廃寺北遺跡は、平成三（一九九一）年十二月より継続的に調査が行われ、平成六（一九九四）年度には、金堂跡と考えられる建物遺構が検出されています。そして、昨年度になって、あの巨大な心礎が出てきたわけであります。

これまでの調査結果をまとめてみると、およそ次のようになります。[1]

① 塔跡遺構は正方形で、東西・南北とも一辺七・〇八メートルの長さです。

② 基壇上面より一二個の礎石（四天柱礎四、側柱礎八）が、そして地下約一メートルのところより、東西・南北ともに約三八メートル、厚さ約一・二メートルの全国最大級の巨大心礎が検出されました。また心礎の柱座（心柱を据えるための穴）の形から、心柱は円形（直径約七六センチ）と推定され、四方に添柱（副柱・直径約二四〜二六センチ）のための穴が穿たれていました。

③　柱座の底に、約五～六センチの厚さで、炭が敷かれていました。これは、心柱の腐食を防ぐために敷かれたと考えられています。また、柱座より、金貼り技法でつくられた純度平均九七・六パーセントの金環（耳環）一二個、水晶玉四個、ガラス玉三個、刀子（小刀）一点などの舎利荘厳具が出土しました。

出土位置は大きく三ケ所に分かれていました。まず、中心よりやや北側で耳環七点、水晶玉二点、ガラストンボ玉一点が、南北一八センチ、東西三七センチの範囲で出土しました。この状況から、心柱の根本付近に北から扶りを入れて埋納孔をつくり、そこにこれらを納めていたものと推測されています。また、これらの舎利荘厳具にベンガラ（酸化第二鉄を主成分とした赤色顔料）が付着していたことから、この埋納孔の内側にはベンガラが塗られていたと考えられています。

次に、柱座内の東側で耳環三点、水晶玉二点が出土しました。このうち、耳環一点は柱座に張り付いた状態で、また水晶玉二点は立った状態で出土しました。この状況から、これらは心柱を立てたあと、心柱と柱座とのすき間に納められていたことが推測されています。そして、柱座の北西部で、耳環二点がたがいに接して立った状態で、また、ガラス小玉一点がその耳環の内側から出土しました。この位置は、心柱と添柱が接する部分に当たることから、心柱を立てたあと、その横に添柱を立てるときに、その間に挟み込むようなかたちで納められたことが推測されています。

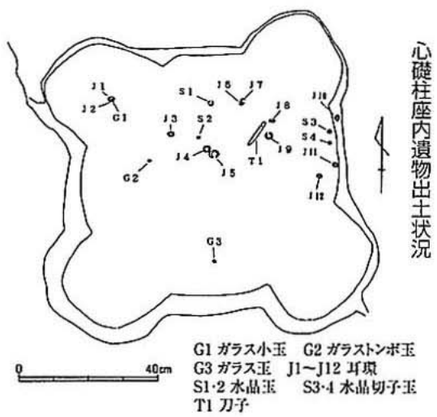
④　出土瓦の中で最も古いものは坂田寺式の軒丸瓦で、文様構成から、七世紀中葉前後のものと考えられています。そのほか、川原寺式、藤原宮式、平城宮式の瓦も出土しています。また、焼けた瓦が多いところから、奈良時代（八世紀）に一度、伽藍が焼失した可能性が高いと考えられています。

⑤　金堂が南北に長い（南北約一六メートル、東西約一四メートルと推定されています）ことと、南面に門跡らしきものが見当たらないことや地形などの点から、伽藍は東に中門を配置した、南北約七二メートル、東西約三九メートルほどの大きさの、法隆寺式伽藍配置であったと推定されています。

⑥　柱の間隔は二・三六メートルで、古代の尺度に直すと、唐尺（唐大尺、一尺＝二九・五センチ）の八尺にあたります。

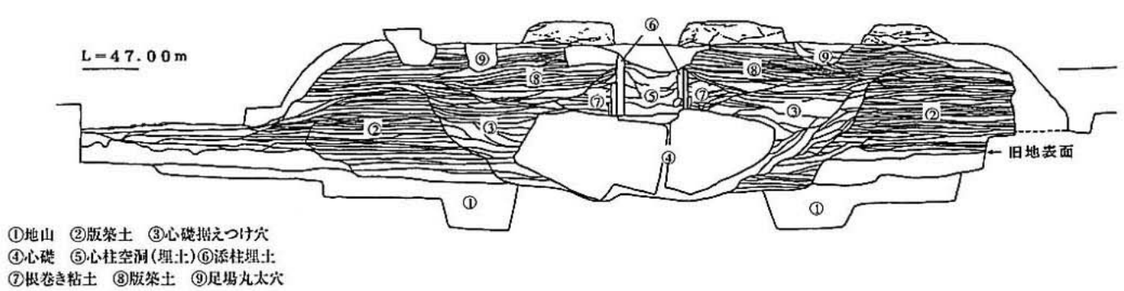
以上が現在までの調査結果の概要です。

心礎柱座内遺物出土状況

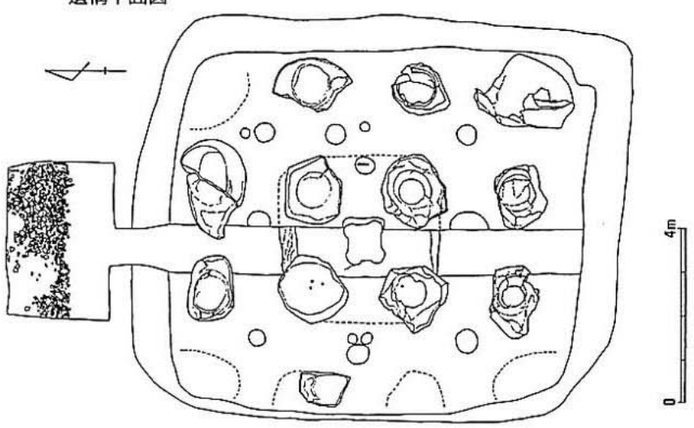


G1 ガラス小玉　G2 ガラストンボ玉
G3 ガラス玉　J1～J12 耳環
S1・2 水晶玉　S3・4 水晶切子玉
T1 刀子

東壁断面図



遺構平面図



順位	寺院名	心礎の大きさ(m)	表面積(㎡)
1	尼寺廃寺（香芝市）	3.8×3.8	14.44
2	久米寺（橿原市）	3.9×2.9	11.31
3	西琳寺（羽曳野市）	3.0×3.0	9.00
	法隆寺若草伽藍（斑鳩町）	2.7×2.4	6.48
	飛鳥寺（明日香村）	2.6×2.4	6.24
	川原寺（明日香村）	2.5×1.9	4.75
	法隆寺（斑鳩町）	1.8×1.8	3.24
	唐招提寺（奈良市）	1.9×1.6	3.04
	四天王寺（大阪市）	1.5×1.5	2.25

◆葛城尼寺説

これらの調査結果をふまえて、考古学者の森郁夫先生は、次のように論ぜられました。少々長くなりますが、いままで発表された研究の中では最もよくまとまった論考と思われますので、その要点を原文で紹介します。

…(上略)…まず年代観であるが、心礎上面から金環などが出土した四例(飛鳥寺・中宮寺・定林寺・四天王寺―塚口)はいずれもごく早いころに建立された寺々である。飛鳥寺は推古天皇元年(五九三)に塔心礎に舎利を納めたことが『日本書紀』に記されており、当然この時に荘厳具も共に納められた。あとの三か寺も創建は七世紀前半の早いころである。金環出土という点で考えれば、尼寺廃寺も同じころの創建ということになる。

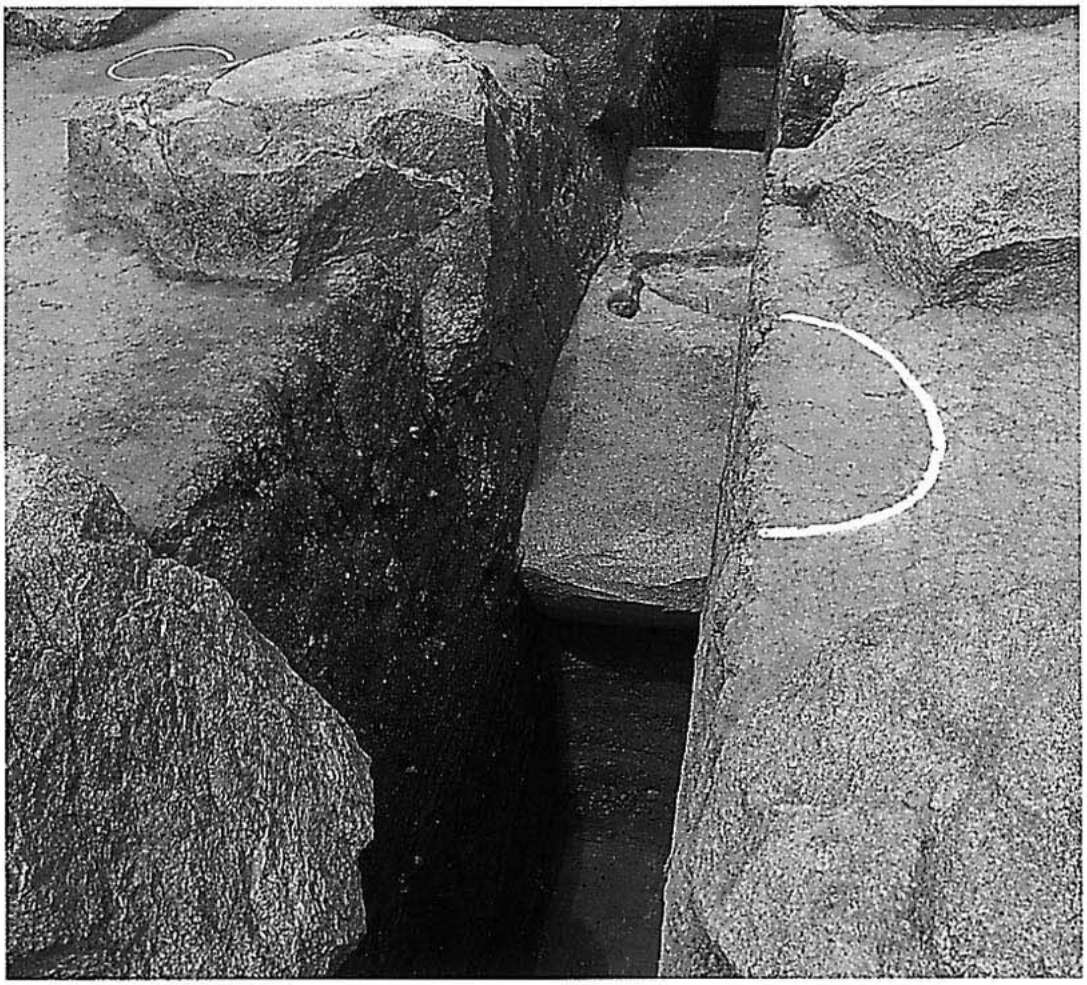
柱座は寸法が若干異なるものの、若草伽藍と全く同じ形である。若草伽藍の創建年代については諸説あるが、創建期に用いられた軒丸瓦から六一〇年代と考えている。したがって、心礎柱座からみても尼寺廃寺の創建年代を七世紀の早いころにおかざるを得ないことになる。

塔心礎の深さという点では、金環出土の四か寺はすべて地下二メートルから三メートルの深さにあり、地下式心礎と呼ばれている。尼寺廃寺のような半地下式心礎の典型的な例は明日香村の川原寺であり、この寺は六六〇年代の後半の創建と考えられている。しかし、若草伽藍の心礎も発掘調査によって地下式ではなかったことが確認されているので、心礎据え付けの深さは建立年代を決める絶対的な条件にはならないのかもしれない。

次に七世紀前半、それも早い時期に建立された寺であれば、伽藍配置は塔と金堂が南北に配置される四天王寺式であるのが一般であるが、尼寺廃寺では塔の北に南北に長い建物が置かれている。そのことによって、東向きの法隆寺式伽藍配置をとっていたものと考えられている。

出土瓦では塔跡に限らず、この寺から出土する最も古いものは「坂田寺式」軒丸瓦であり、文様構成からそれは七世紀半ば近くにおかれるものである。

このように、五つの条件からはこの寺



の創建年代に幅がでてきてしまう。では何を重視すべきであろうか。私は舎利荘厳具の内容と、巨大な石に柱座を穿ったその技術の系譜に注目したい。

繰り返すようであるが、心柱八角、それに礎柱用の掘り込みを加えたものは法隆寺若草伽藍にしか見られない。法隆寺との距離はたかだか六キロ程度でしかない。聖徳太子と深い関わりの伝をもつ片岡王寺にも近い位置にあるこの寺は、斑鳩地域の工人集団の技術を多く採用して造営されたものと考えられ、その発願者は大きな力をもっていたことが知られるのである。

『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』には法隆寺、四天王寺、中宮寺、橘寺、広隆寺、法起寺、葛城尼寺の七か寺が推古天皇と聖徳太子が関わった寺としてあげられている。今回発見された巨大な心礎をもつ尼寺廃寺こそ、唯一その所在が明らかでなかった「葛城尼寺」である可能性が高いのではないかと考えられるのである。この地はかつて大和国葛下(=葛城下)郡であった。

また、菅谷文則先生や法隆寺管長の高田良信先生も、森先生とほぼ同様の根拠にもとづき、葛城尼寺説を主張しておられます。はたしてこれらの説は、当を得ているのでしょうか。

◆葛城尼寺説は成り立つか

尼寺廃寺北遺跡=葛城尼寺説は、とても魅力的な説です。だが、私の考えを素直にいえば、森先生らの鋭利な考察にもかかわらず、ただちにこれらの説には従うことができません。まず寺院の名称からみていきましょう。

『続日本紀』光仁天皇即位前紀の条に、次のような童謡がしるされています。

葛城寺の前なるや、豊浦寺の西なるや、
おしとど、としとど、桜井に白壁しづくや、好き壁しづくや、おしとど、としとど、
然かすれば国ぞ昌ゆるや、吾家らぞ昌ゆるや、おしとど、としとど。

これによると、葛城尼寺(葛城寺)は高市郡に所在した豊浦寺(明日香村大字豊浦)の西北、もしくは西にあったことになります。この点については福山敏男先生や田村吉永先生らのすぐれた研究があり、今日にいたるまで、ほとんど異説をみません。したがって、この説を否定しないかぎり、尼寺廃寺北遺跡を葛城尼寺とすることはできないと思います。なお、現在の学界では、橿原市和田町にある和田廃寺を葛城尼寺に比定する説が有力となっています。

次に創建年代について考えてみます。

① 出土瓦の中で最も古い坂田寺式軒丸瓦は六四〇年代前後の時期に編年されていますが、実は、研究者によっては、もう少し下げる見方もあり、また、その年代自体にも若干の幅を設ける必要があります。特に尼寺廃寺北遺跡出土のものは、「坂田寺式」といっても、坂田寺跡(奈良県高市郡明日香村大字阪田)出土のものより若干くだる可能性が強いと考えられます。したがって現在のところ、六四〇～六六〇年代ごろとみておくのが無難ではないでしょうか。

② この寺院と同じ半地下式心礎をもつ川原寺の創建は六六〇年代後半と考えられていますから、この寺院の創建も、それに近いころとみるべきではないでしょうか。

③ この寺院に使用されている唐尺は、いわゆる大化改新(六四五年)以降に使用された尺度と考えられますから、この寺院の創建も、それ以降のこととみるべきではないでしょうか。事実、唐尺によって造営されている建築物や古墳などは、いずれも七世紀中葉(というより、そのほとんどは七世紀後半)以後のものに限られているのです。

以上の理由により、この寺院の創建は、六四五～六六〇年代前後とみるのがよいと思います。

このように考えてまいりますと、この寺院が聖徳太子やその一族(上宮王家)によって創建されたとする仮説は、ほとんど成立しないといわねばなりません。なぜなら、太子は六二二年に逝去していますし、その一族も六四三年に滅亡しているからです。

聖徳太子の一族がこの地域と何らかの関わりをもっていたことは、おそらく想定して誤りないでしょう。そのことは、次の二つの史料から推測できます。

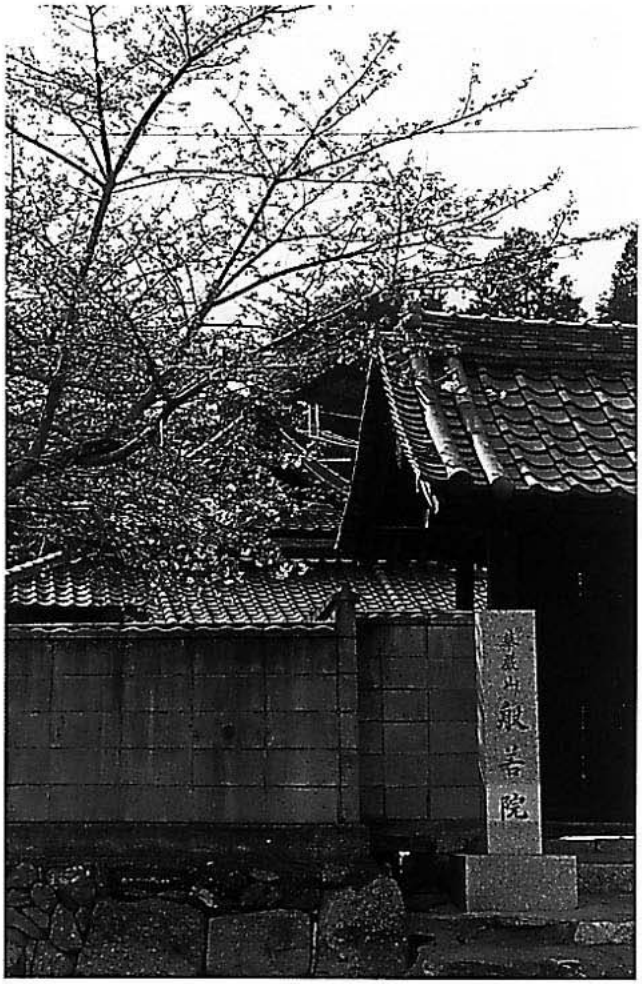
その一つは、『日本書紀』推古天皇二十一(六一三)年十二月の条にしるされている、いわゆる片岡山尸解仙説話です。この説話によると、聖徳太子は片岡山で真人(仙人)と出会ったといいます。

他の一つは、聖徳太子の子供の名前です。聖徳太子の伝記集の一つである『上宮聖徳法王帝説』(平安時代中期の成立)や、『聖徳太子平氏伝雑勘文』下三に引用されている『上宮記』などの史料によると、聖徳太子には片岡女王(片岡王)という子供がいたと伝え

られています。したがって聖徳太子の一族は、片岡の地と全く無縁ではなかったのです。

しかしながら、尼寺廃寺北遺跡の創建が上宮王家滅亡事件(六四三年)以後のことであったとするならば、もはや太子の一族にはこのような大寺院を建てる余裕はなかったはずです。法隆寺が再建される七世紀後半以降の時代であればまだしも、六四五～六六〇年代という時期では、太子一族による創建はとても考えにくいことなのです。

もっとも、六四三年以降のある時期に、尼寺付近にいた豪族が太子の遺志を受け継いでこの寺院を創建した、というような仮説も成り立たないわけではありません。しかし、この場合、尼寺付近にそのような豪族が盤踞していたということを、証明する必要があります。だが、残念ながら、現在のところ、尼寺付近にそのような豪族が盤踞していた証跡は全くみいだすことができません。

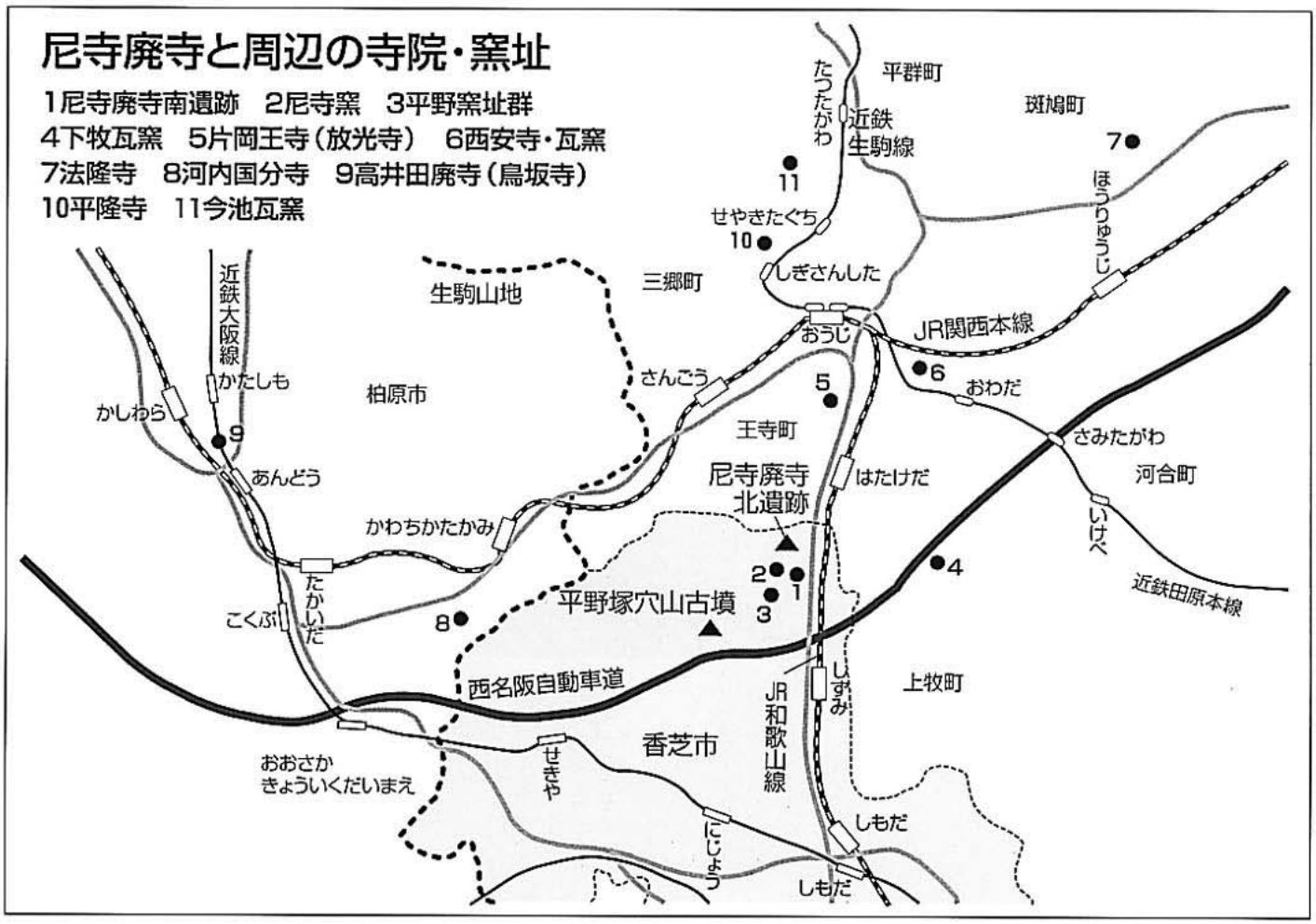


◆創建者はだれか

では、この寺院は一体、だれによって建立されたのでしょうか。そこで注目されるのが、敏達天皇の孫の茅渟王の存在です。

「延喜式」(九一七年成立)諸陵寮によると、茅渟王の墓は「片岡葦田墓」と称され、葛下郡に営まれたとしるされています。この片岡葦田墓とは地名による命名で、私見によれば、それは尼寺廃寺北遺跡の南西、約一キロメートルの地にある平野塚穴山古墳にほかなりません。奥津城は被葬者の本拠地であったところに営まれる場合が少なくありませんから、香芝市北部は、茅渟王およびその一族の本拠地ともいうべき土地がらであったと考えられます。ちなみに、片岡の葦田とは、王寺町四丁目から香芝市および上牧町の西部(旧大字北上牧)に至る付近一帯を指す地域の呼称でした。

一方、王寺町本町二丁目に所在した片岡



僧寺（片岡王寺・放光寺）は、七世紀代に建立された茅渟王ゆかりの寺院であり、その後も、茅渟王を始祖と仰ぐ大原真人氏の氏寺として存続しました。[3] 従来、この寺院は大原史氏の氏寺と考えられてきましたが、おそらくそのような考え方は誤りだと思われます。[4]

してみると、七世紀代における王寺町から香芝市北部にいたる地域は、茅渟王系の一族の勢力下に置かれていたのであり、したがって尼寺廃寺北遺跡もまた、茅渟王系の一族と深い関係にあった寺院である、と考えられねばならないのではないでしょうか。換言すれば、尼寺廃寺北遺跡の創建者は、茅渟王系の人たちであった可能性が強いということです。

◆寺院の名称は何か

次に、この寺院の名称について考えてみたいと思います。この問題については、遺跡検討会が行われた当初より、私は、次の二つの可能性を提起してまいりました。

① 今回調査された尼寺廃寺北遺跡と、その南方約一〇〇メートルの地に存在する未調査の尼寺廃寺南遺跡とが、もし一体のものであったとするならば、寺院の名称は次のように考えることができます。

現在、南遺跡の近くに阿弥陀如来を本尊とする般若院（融通念仏宗）がありますが、同寺に安置されている毘沙門天立像の背面腰部の墨書きによると、同寺は「華厳山般若院片岡尼寺」と称していたといいます。

一方、保延六（一一四〇）年三月の巡礼にもとづいてしるされた大江親通の『南都七大寺巡礼私記』に、次のような記事が出てまいります。

般若寺別当迎彼寺之塔所敬安置也。
件般若寺亦号片岡寺

すなわち、これによると、般若寺は片岡寺とも称していたことになります。

ところが、ここにみえる般若寺は、唐僧・天台沙門思託が延暦七（七八八）年に撰した『延暦僧録』（巻二）所載の『上宮皇太子菩薩伝』にもみえ、それによると、"尼寺"であったことが知られます。

以上によって、般若院の前身とみられる般若寺（般若尼寺）は、"片岡尼寺"とも称されていたことがわかります。[7] 現在の"尼寺"という地名も、おそらくこの寺院の名称に由来しているのではないでしょうか。

このように考えてまいりますと、般若院の近くに片岡尼寺と呼ばれた古代寺院が建立されていたことは、ほぼ確実とみなければなりません。しかりとすれば、飛鳥時代最大級の塔の心礎をもつ尼寺廃寺北遺跡は、まさしくその片岡尼寺（般若尼寺）に該当するといってよいでしょう。

② しかし、尼寺廃寺南遺跡がその名の示すとおり寺院跡であり、かつ北遺跡と全く関係のない別個の寺院であったとすると、①の仮説は成り立ちません。この場合、現在、半ば通説となっている「片岡僧寺＝片岡王寺」説は再検討されねばならず、北遺跡は片岡王寺であった可能性も出てきます。

もしそうであるならば、般若院に近い南遺跡が片岡尼寺となり、これとは別に、片岡の地名を冠した寺院が王寺町と香芝市に二寺（片岡僧寺と片岡王寺）、同時に存在していたことになります。

以上、寺院の名称について二つの仮説を述べましたが、現在のところ私は、前者の方が可能性としては高いのではないかと、ひそかに思っています。しかし、結論は、今の段階ではまだ出せません。北遺跡のみならず、南遺跡の全容が明らかにならなければ、断定的なことはいえないからです。この意味において、将来、両遺跡の全面発掘が行われることを期待しています。

だが、いずれの考えをとるにしても、尼寺廃寺北遺跡の創建に茅渟王系の一族が関与していたことだけは、ほぼ間違いないといってよいのではないでしょうか。さらにいえば、上宮王家滅亡後、茅渟王系の一族は若草伽藍を建立した技術者集団を取り込んで、尼寺廃寺北遺跡の塔を建立したのかもしれません。[8]

なお、「上宮皇太子菩薩伝」によると、般若寺は聖徳太子によって建立されたとしるされています。しかし、これは同書に、舒明天皇によって創建された「大官寺」（大官大寺＝大安寺）もまた太子によって建立されたと書かれているように、後代の仮託と考えられます。奈良時代以降になると、聖徳太子信仰が高揚し、本来、聖徳太子と関係のなかった寺院までが、聖徳太子によって建立されたと主張するようになるのです。

以上、思っていることを素直に書きました。私の考えが当たっているかどうかについては、皆様方の判断にゆだねるほかありません。はじめにも述べましたように、この小文も一つの仮説ですから、ぜひ皆様方も一度、尼寺廃寺北遺跡の謎に挑戦してみてください。

（堺女子短期大学学長・文学博士）

〔注〕

(1) 以下の叙述は、山下隆次「奈良県香芝市尼寺廃寺塔跡の調査」（『月刊考古学ジャーナル』四一四、ニュー・サイエンス社、一九九七年）、同「尼寺廃寺跡第10次調査」（『平成八年度奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』（奈良県内市町村埋蔵文化財担当者連絡協議会、一九九七年）などに負うところが多い。

(2) 『讀賣新聞』一九九六年四月二十二日号（夕刊）。

(3) 福山敏男「葛木寺及び屈坂寺の位置について」（『大和志』第一巻第三号、一九三四年、のち同『日本建築史研究』〈墨水書房、一九六八年〉に再録）、田村吉永「葛木寺の位置に就いて」（『大和志』第四巻第十一号、一九三七年）。

(4) 塚口「平野塚穴山古墳の被葬者について」（『有坂隆道先生古稀記念日本文化史論集』所収、同朋舎、一九九一年）。

(5) 塚口「茅渟王伝考」（『堺女子短期大学紀要』第二十五号、一九九〇年）。ただし実際は、大原真人は天平十一（七三九）年に高安王・門部王・桜井王・今城王らが臣籍に降下して成立した氏族です。

(6) 平林章仁「聖徳太子と敏達天皇後裔王族」（『日本書紀研究』第十六冊、所収、塙書房、一九八七年）。

(7) 田中重久「上代王寺盆地の仏教文化」（『大和王寺文化史論』所収、大和史学会、一九三七年）。

(8) たとえば、『毎日新聞』一九九六年四月十一日号（朝刊）における塚口の発言。